

第2部 「名所『鳴門の渦潮』と阿波・淡路」の概要

藪田 貫

この部には根津・松永・森本・町田の四人の報告を収める。

まず根津報告によれば、天正13（1585）年、蜂須賀正勝は豊臣秀吉に従い、嫡子家政とともに四国攻めに参戦し、その功で家政に阿波一国が与えられた。その後、慶長20（1615）年の大坂夏の陣の戦功によって淡路が加増され、蜂須賀氏は阿波・淡路二国25万7000石の領主となった。このことは、大鳴門・小鳴門双方を含む鳴門海峡の地政学的な安定をもたらすこととなった。

鳴門海峡は、瀬戸内と紀伊水道の海上交通の要衝であったが、蜂須賀氏による治政の安定の結果、土佐泊城森氏や撫養城番益田氏による海上統制の体制は一変され、藩の直轄下に入った。阿波の小鳴門海峡には撫養口を守る岡崎屋敷と北泊口を守る北泊屋敷、そして対岸の淡路には福良浦屋敷が設けられ、岡崎と福良には屋敷に付属して十人衆が置かれることとなった。こうして阿波と淡路間の海上交通は、人とモノ双方が一元的に管理される体制が出来上がったのである。

こうした体制の下で、鳴門海峡を通した人とモノの移動が展開したが、松永報告は人に、森本報告はモノに焦点をあて、その様相を解明している。西宮神社社家の事例によると、大坂から阿波への移動については、大坂中之島に所在した徳島藩蔵屋敷留守居が許可・発行する切手（手形）を入手する必要があった。一方、阿波から大坂に向かう時には、徳島の町奉行の発行する手形が携行され、さらに岡崎や福良・岩屋の番所などでチェックを受けるのである。こうしたシステムに依拠することで、名所「鳴門の渦潮」はひろく認知されるに至ったが、徳島から撫養をへて見物した国学者加藤景範と、淡路から「鳴門の渦潮」を見物した漢学者篠崎小竹はそれぞれの渦潮を実見し、加藤は歌で、小竹は漢詩で紹介し、渦巻く様子と同時に「雷鳴あるいは猛獣の吠えるがごとく」と音にも注目している。

それに対し森本報告は小鳴門海峡に位置する撫養湊に焦点をあて、18世紀後半、入津廻船の減少にともない衰微していた同湊が、他国からの米穀と肥料（干鰯）の移入が許可されるにともない発展し、1880年代には大阪・兵庫・下関・津田（徳島県）に次ぐ五番の移出入量を記録するまでに躍進したことを示す。その物流を担ったのは、特産品の藍作に投下される北海道産鯡粕を運んだ北前船で、撫養の廻船問屋山西家の取引先の中心でもあった。撫養湊への物資の運搬では、「渦潮」の巻く大鳴門ではなく、播磨灘から北泊をへて撫養口から出る瀬戸筋が重視され、撫養には岡崎屋敷と岡崎・北泊番所のほ

か、会所・塩改会所・米改会所・銀札場などが整備されていた。

森本報告はさらに撫養に入津する10反帆・千石積程度の北前船と並んで、淡路に船籍を持つ二人乗り・二反帆の小さな廻船が撫養との間を出入りしたことも合わせて示し、遠距離と近距離の双方の廻船による通商圏が成立していたことを明らかにした。その結果、物流を担う廻船の姿がかなり明らかになったが、人を運ぶ廻船については課題が残されている。

名所「鳴門の渦潮」は、阿波と淡路の間に生起する渦潮を指しているが、18世紀後半の作とされる「阿波国大絵図」などいくつかの絵図・地図は、それを「大鳴門」として示し、播磨灘との出入り口、北泊に小さな渦潮を描き、「小鳴門」と言うべき世界があったことを示唆する。この世界を、ひとつの地域として捉えた文献として「鳴門辺集」がある。

「鳴門辺集」は鳴門・撫養・北灘の25カ村・7カ浦を紹介した地誌であるが、町田報告は、幕府から派遣された巡見使を案内した経験のある文人の手になる同書を、地元の人々による「地域再発見の書」と位置付けるとともに、地域内の生業（第3部名所「鳴門の渦潮」の産業で紹介）と並んで孫崎での渦潮見物、大毛山での鹿狩りなど歴代藩主の行動に注目し、一般人民が自由に立ち入れない「御留山」である大毛山の「制動人」西條家の存在を明らかにするなど、徳島藩政のなかで大毛山が特別の場所となっていたことを明らかにする。

大鳴門が淡路に向けた「外の世界」を示すとするなら、「鳴門辺集」は、その後背地に位置する、内の海と小鳴門海峡を含む「内の世界」を如実に示している。

（「鳴門の渦潮」世界遺産登録学術調査検討委員会委員）